
お断り

snake

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嘸殺し

【Nコード】

N3516W

【作者名】

s n a k e

【あらすじ】

現代社会に溢れる都市伝説

とある不思議な嘸家がこれを消すために戦う

第一部 「妄想具現」

世に数え切れぬほど存在する”都市伝説”

時代と共に語られ時代と共に消えてゆく

どれも現実には起こらないような作り話

だが、もしかすると真実を語った物語もあるかも知れない

これはとある不思議な噺家の”お噺”

だだの『作り話』か、紛れもない『真実』であるかはあなたが決めること

それでは、始まり始まり

第一部 「妄想具現」

とある通りの少し寂れた小さな寄席

立ち寄る客も少なく話題になる事もない

そんな静かな寄席で

今日も噺家は開演を待っていた

「そういえば知ってますか？『廃ビルの魔法使い』の話」

「はい？」

突然同じ寄席で公演していた芸人に話し掛けられたのだ

「あれ？知りませんか？ここらじゃ有名な都市伝説ですよ？」

この街では都市伝説が常に生まれている

1日ごとに現れ、消える都市伝説は今やこの街の醍醐味となっていた

「はあ…知りませんね、流行とかそういうの疎くて…」

「そうですか、だったら話しましょうか？公演の参照とかのために」

「ええ、よろしく願います」

こうして芸人は都市伝説を語り始めた

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

この街のどこかの廃ビルに何でも出来る魔法使いが居るらしい

その魔法使いに願えばどんな願いも叶ってしまつらしい

だがその廃ビルが何処なのか誰も知らない

I I

開演時間が近づき芸人に「感想は？」と聞かれた噺家は一言

と言いつつ舞台に向かった

うつすらと雪が降る中、嘶家は上着を羽織り歩いていく。道端ではおば様方が噂話に没頭し

これまでに騒がしい中でも必ず聞こえてくるキーワードがある

「聞いたか○○○○って都市伝説」

この街にいる限り話題の種は尽きる事はない
だが、都市伝説と同時に増えているものがある

「そういえば、また出たんだってな”変死体”」

「最近、ずっとだよー」

「犯人捕まらないかなー」

そう”変死者”

この街で最近増えているのだ

最初は二週間ほど前

食べ物を大量に頬張った為、喉に詰まらせ窒息死

二人目はその二日後浴槽を酒で満たしその中で溺死

その後もいくつかの”変死者”が確認されている

そして、死体の近くには住所が書かれた紙が置かれており

その住所の場所は全て廃ビルだったらしい

ここから『廃ビルの魔法使い』の都市伝説が生まれたのだろう

「魔法使い……ねえ」

嘶家は廃ビルを見上げた

その廃ビルは使われてないと言うのに時々人が入っていく

その情景を見た嘶家は

小さく笑いその場を後にした。

ここはどこかの廃ビル

男は日も沈んだ静かな街を眺める

今日、訪ねてきた人は三人、バカみたいなカップルと病人だった
「死ぬほど愛し合って居たい」とカップル願ってきた、だから滅多
刺しにしてやった

後で化粧でもして二人一緒に捨てておけばそれなりに愛し合っているように見えるだろう

男は何もかもうまく行かなかった

いくら努力をしても結果をだせず職を転々としていた

そんな弱者はある日魔法使いへと変わった

何もかもが考えた通りに結果が出た

そして男は訪れる者の願いを叶えた

そしてその囁はたちまち都市伝説として語られた

最初に来た男は「死ぬほど大量の食べ物が欲しい」と願った
だから叶えてやった

他の奴らも

この力で

「やあ、初めまして『廃ビルの魔法使い』さん」

思わぬ来客だった

着物を着てその上に羽織を羽織った女性

この男の” 嘶 ” を殺しにきた嘶家に

男はいつもどおり問い掛けた

「あなたの願いは何ですか？」

「……」

嘶家はその問い掛けには答えなかった

「どうしました？ 言うてご覧なさい？」

「いい加減にしたらどうです？」

あなたは願いを叶える気など無いでしょう？」

「そんな事は……」

「いいえ、あなたはただ人を殺したいだけ

その証拠にその子を殺したでしょう？」

嘶家が指差した先には車椅子に座った少女がいた

少女は重い病を持っていた

医者にも匙を投げられ最後の希望として男を訪ねたのだ

男の力があれば完全に治す事が出来た

だが、男は少女を殺した

ただ自己満足の為だけに

「……ああ、そうさ…殺せるなら誰でも良かった

楽しかったさ、ただイメージするだけで何でも思った通りになるこの楽しさはお前には分からないさ！」

「結局はあなたは力に酔った殺人鬼だ」

「ハッ！…だからどうした！」

この際だあんたも死んでくれ！！」

男は嘶家目掛け襲いかかった

「あっははははは！！！」

あらゆる武器をイメージから作り上げ形にする

それを何度も繰り返し武器を増やす

男はその夥しい数の武器を使い嘶家を八つ裂きにするはずだった

「はは……は？」

だが、その無数の武器は嘶家が持つ刀の一薙で全て破壊された

「この刀は矛盾を切る刀

この刀の前ではあなたの武器なんてただの鉄クズ
あなたがイメージから作る武器では幾つあっても私の命までは届かない」

つまり

男がイメージから作る矛盾だらけの武器を幾ら使おうと

この嘶家の一糶で全ての矛盾はかき消されてしまう

故に男が勝つことは出来ないのだ

「う…うあああああ…！」

男は逃げ出した

必死になって嘶家から逃げた

だが今や男は弱者となっていた

そう何事もうまく行かない弱者に

「はあっ…はあっ…うぐあっ…！」

男は階段から落ち足を挫いた

それでも逃げようとした

「はあっ…で、出口」

「無駄ですよ」

だが遂に嘶家に捕まった

「はあっ…た…助けて…頼むよ…」

男の言葉に嘶家は一言

「馴れ合うな、殺人鬼

私はお前等を狩る側なんだから」

嘶家は刀を振り下ろした

その日を境に『廃ビルの魔法使い』は語られ無くなっていった

魔法使いの最後を知るものは嘶家を除いて誰もいない

そして嘶家は

今日も都市伝説を消していく

第一部 —了—

第二部 「最速」

——暑い

世間は完全に冬を迎えていた

——熱い

だが、私には冬の寒さなんて分からない

なぜなら、私は常に燃えていたから——

第二部 「最速」

私は速さが欲しかった

誰にも超えられない”最速”が欲しかった

だけど、事故で両足が動かなくなった私には到底無理だった

そんなある日私は魔法使いと出会った

その魔法使いは動かなくなった両足に”最速”を与えてくれた

その時、まだ、私は知らなかった

その魔法使いは”悪魔”だったことを

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

この日、公演を終えた嘶家はいつもどおり散歩に出ていた

外は完全に冬だった

街には雪が降り積もり肌を刺すような寒さの中人々が言ったり来たりしている

いつもと変わらぬ散歩の風景

ただ、先ほどから付いて来る人影を除いて

冬では考えられないような薄着で顔が隠れるほど深くフードを被っている

一見、亡霊のような雰囲気的人物が付いて来ているのだ

嘶家は人目の無い路地裏に入った

少ししてから付いて来ていた人影が現れた

その姿は観れば観るほど亡霊のように生気が無く
その亡霊周りには陽炎が揺らいでいた

「私に何か用？」

「――」

返答は無い

「あなたは人間？」

「――私は」

亡霊の周りの陽炎が一層揺らいでいく

「――私は――怪物だ」

途端、亡霊は一瞬にして燃え上がった

だが、火だるまになった亡霊は倒れる事無く此方へ襲いかかって来た

その動きはまるで動物のようで

そのスピードも軽く人間を凌駕していた

『炎上する怪物』

それはいくらか前から騒がれていた都市伝説だった

「まさか本当だったとはね……」

嘶家は刀を構えた

存在が矛盾している怪物なら一太刀で片が付く

嘶家はじっくり隙が出来るのを待つ

怪物は壁から壁に飛び回り噺家の死角から飛びかかった

「甘いつー!!」

噺家は振り向きざまに怪物を斬りつけた

が、怪物はそれを察したか身を翻し避けた

怪物は噺家から距離を取る

その腕には避けきれなかったのか、深く切り傷があった

「――!!」

怪物はその場から逃げ出した

壁を駆け上がり街の中に消えていった

その場に残ったのは

噺家と焼け焦げた壁と地面だけだった

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

最初は些細なことだった

走れば走るほど体が異常な程火照った

冬場にもかかわらずまるで夏の日差しの中に居るような感覚だった

そこから、ただ歩くだけでも体は燃え上がるように熱かった

そしてある日、私の体は燃え上がった

何があつたのか分からなかった

燃え上がる体はさながら火を噴くエンジンのよう

私はあの時会つた魔法使いに問いただした

すると魔法使いは

「君は足を動かしたかつたんだろうだから動くようにしてあげただけだよ

ただ、命を引き換えにだけどね

その足は君の寿命が原動力で動くエンジンだ

だから、君は命の最後の一滴まで”最速”の為に燃やし尽くしてくれ」

この時私は目の前に居るのが悪魔だと知り

私は獣になった

この”最速”は狩獵の為に使い切ろうと決意した

そう——私は怪物

私は怪物になった――

|||||

寿命が尽きかけているのがわかった

時々、意識が遠のき体は所々痺れている

終わりが近付いている

なら――最後に昼間に見つけた獲物を狩るとしよう

残りの命の最後の一滴まで使って――

夜、嘶家は昼間のあの場所にいた

あの怪物を狩るために寒空の中待っていた

すると、背後から冬では有り得ないチリチリとした熱さが伝わってきた

今、狼と狩人が対峙した

「こんばんは、怪物さん」

「――ウ――アア――」

怪物は言葉を捨てた

嘶家を狩るために余計なエネルギーを使わない為にも

怪物は一層燃え上がった

「——ウ——ヴオオオオ!!!!」

怪物は嘶家に飛びかかった

怪物は満足に動かなくなつた腕で嘶家の急所を狙う

怪物はボロボロの足で嘶家を蹴り殺そうと急所を狙う

だが、嘶家は全て避ける

怪物はそれでも嘶家を狩るために尽き欠けた命を燃やし続ける

だが、怪物の動きは次第に鈍っていく

「——ヴオオオオ!!!!ヴオオオオオオ!!!!」

怪物は最後の命を振り絞り絞り嘶家を殺しにかかった

「無駄よ、そこまで落ちた身体能力で私は殺せない!!!!」

嘶家はその怪物を切り捨てた

|| || || || || || || || ||

命が終わった

体を動かすエネルギーが無くなった

いつも燃え上がっていた私の体温は遂に尽きた

——寒い

手足の感覚が消えていく

意識が途絶えていく

そして私の”最速”は今、消えようとしている

——寒い

体が死に覆われていくのがわかる

——寒い

ああ、これが……”最速”を求めた私の末路

これが……冬

やっと……私にも冬が来た……

さよなら、この世界

さよなら、私の”最速”

「さよなら、狩人さん」

こうして、怪物に冬「死」が訪れた

|| || || || || || || ||

最速を求めた怪物

速さを求めた故に燃え尽きた獣

その末路を知るものは

獣の最期を見守った

一人だけである

第二部 「最速」 —了—

第三部 「過去と未来」

「はあっ…はあっ…」

華やかな街の明かりも届かない路地裏
とある男が息を切らせ走っていた
敵から逃げるため一心不乱に走りつづける

「はあっ…はあっ…クソッ」

走り疲れた男は近くの壁に座り込む

「何だってんだ、チクシヨウ」

あの野郎…なんで俺の『力』が通じないんだ…!!」

男は相手の未来と過去を観ることが出来る
だが、男が逃げている敵には通じない

今まで数多の人の未来や過去を観てきた
なのにその敵は全く観る事が出来ない
それでは、まるで――

「まるで…過去がないみたいじゃないか…!!」

そんな事はもちろん有り得ない
過去の無い人間など有り得ない

「そんなの…矛盾してる!!!」

人間としては矛盾している

だが、その敵は

存在も

目的も

過去も未来も

全てが矛盾していた

「矛盾している——か

ええ、確かに私は矛盾している

けど——それはあなたもでしょう?」

男の前に今まで逃げていた敵が

嘶を消し続ける嘶家が現れた

「ク…クソッ」

男は、無駄と知りながら嘶家に力を使う

だが、嘶家に過去など無い

それはとつくに捨てたものだから

嘶家に未来など無い

それは――

「私はとつくにしんでいるんだから――

けど、そんなに観たいなら観せてやる

私の過去を――」

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

とある所に少女がいた

少女は変わったところはない一般人だった

だが、少女はイジメを受けていた

クラスメイトから無視され常に独りだった

イジメは時がたつにつれエスカレートしていった

ある日、少女はそのイジメにより大きな怪我を負った

その頃から少女は考えていた

なぜ――私だけなのか

そして少女は遂に折れた

生きること疲れビルから投身自殺を考えていた

観えた……お前の未来が観え——」

途端、男は切られた

男が観た未来はおそらく嘶家が死んだ未来

だが、それは——

「あなたが何を観たかは知らないけど

それは、あなたの妄想に過ぎない」

こうして男はその場に倒れ込んだ

そして誰もその男を見つけるとは無かった

第三部 ——了——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516w/>

お断り

2011年10月9日15時56分発行